

移植医療「国内浸透を」

患者団体代表・青山さん(青森市出身 大阪府在住)

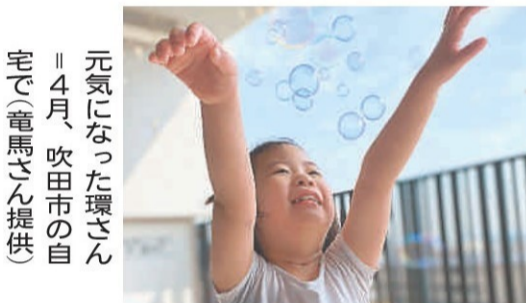
娘の手術 社会意識 変化願う

4年前に米国で心臓移植を受けた青山環さん(6)の父親・竜馬さん(40)＝青森市出身、大阪府吹田市在住＝が臓器移植患者団体「トリオ・ジャパン」(東京)の代表を務め、移植医療の啓発活動に取り組んでいる。2010年7月に改正臓器移植法が施行されて10年。今年小学1年生になった環さんの元気な姿を見ながら、国内でもっと移植医療が浸透してほしいと願っている。

生まれつき重い心臓病を患っていた環さんは16年9月、米国シアトルで心臓移植を受けた。渡航費・医療費約3億2千万円は、本県など全国の支援者による募金活動で集めた。海外で移植を受けなければならなかった背景には、国内で臓器提供が少なく、ドナー(臓器提供者)がいつ現れるかわからないという事情があった。移植後、環さんの容体は安定、体調は回復した。18年、竜馬さんは「移植を受けられずにいる患者・家族の力になれば」と、トリオ・ジャパンの代表に就任した。会社に勤めながら、講演したり、海外渡航移植希望者の相談に乗ったりしている。



吹田市の療育園卒園式で記念撮影に臨む環さん(左手前)、竜馬さん(左)、夏子さん(右)=3月(竜馬さん提供、一部画像を加工しています)



元気になった環さん
＝4月、吹田市の自宅で(竜馬さん提供)

Q 臓器移植法 1997年10月16日に施行され、脳死と判定された人からの臓器提供が可能になった。当初は書面による本人の意思表示と家族による承諾が必要で、15歳未満は満からの提供も認められた。

提供が可能になった。改正前は10件前後だった国内の脳死臓器提供は年々増え19年は97件となった。しかし、移植医療が一般的になっていく欧米に比べると、日本の実績は極端に少なく、特に子どもの臓器提供の少なさが指摘されている。

「日本では、移植医療が現実の医療としてまだ受け入れられていないと感じる」と竜馬さん。「提供施設や受け入れ施設の負担の大きさなど、隠れた問題が山積している。コロナ禍で日本の医療資源の乏しさが鮮明になった」とも言う。

今年小学1年生になった環さんは、他の子どもより成長が遅いが、元気に通学している。同級生は、環さんの病気に理解を示し、仲良くしてくれている。

移植を受ける前の環さんは、いつ命を落としてもおかしくないという崇高な意思が、生かせる社会になってほしい

「臓器提供に関する意思表示が広がれば、日本の移植医療は変わる。臓器を『もらう』『あげる』だけでなく『もらわない』『あげない』という意思も等しく尊重される社会風土の醸成が大切。臓器を提供した